

あるとき、子どもが海岸を歩いていて、海藻かいそくをひろいました。うちに持ってかえって、「これ、なんだろう」ときくと、父親が、

「ああ、これは『かからかん』っていうもんだ」といいました。すると、母親が、

「ちがいますよ。『ししらしん』ですよ」といいました。それを聞いたおばあさんが、

「いやいや。これは『なまらまん』だよ」といいます。

三人は、「かからかんだ」「ししらしんだ」「なまらまんだ」といいはって、らちがあきません。そこで、お寺の和尚おしょうさんにきいてみることにしました。

父親は、お寺へ出かけていって、和尚さんに、

「これはなんというものですか」とききました。和尚さんは、

「さあ」といって、首をかしげました。父親は、

「そんなら、これは『かからかん』ということにしておいてくださらんか」といって、二百文もんのお金を置いて帰っていきました。そして、うちに帰ると、みんなに、

「和尚さんは、『かからかん』だっておっしゃったぞ」といいました。すると、母親が、

「そんなはずはありません」といって、お寺に行きました。けれどもやっぱり、和尚さんは、

「さあ」と首をかしげるばかりです。そこで、母親は、

「では、『ししらしん』ということにしておいてくださいな」といって、二百文置いて帰りました。そして、みんなに、

「和尚さんは『ししらしん』だっておっしゃったよ」といいました。すると、おばあさんが、

「そんなはずはない」といって、やっぱりお寺に行きました。そして、和尚さんに、

「これは『なまらまん』ですよね」といって、また二百文置いて帰りました。

おばあさんが、みんなに、

「和尚さんは『なまらまん』だっておっしゃった」というと、また「かからかんだ」「ししらしんだ」「なまらまんだ」といいあって、どうにもらちがあきません。みんなが、

「和尚さんがたしかにそうおっしゃった」といいはります。そこで、みんなでいっしょに

お寺に行くことにしました。

和尚さんに、

「いったいどれがほんとうの名前なんですか」とたずねると、和尚さんはいいました。

「いやいや、これは、『かからかん』でも『ししらしん』でも『なまらまん』でもない。『二

二六百よろこんぶ』というもんじゃない」

おしまい。

原話：『昔話研究第十号』「高島郡昔話」／三元社刊

再話：村上郁